

内村鑑三 闘いの軌跡(六)

A Critical Biography of UCHIMURA Kanzo (Part 6)

関 口 安 義

SEKIGUCHI Yasuyoshi

第六章 『基督信徒の慰』の刊行

一 聴かれざる祈祷

虚構の自伝

これまでしばしば引用した『余はいかにしてキリスト信徒となりしか―わが日記より』が、彼の実人生に深く添った、英語で書かれた自伝なら、本章で扱う『基督信徒の慰』(警醒社書店、一八九三・二)は、自身の歩みに光を当てて、日本語で書かれた虚構の自伝とも言えようか。前者が主として英語圏の読者を意識し、英文で認められていたのに対し、後者は母国日本人のために、日本語で記された著作である。彼はここに自己の歩みに照らして、神の大きな恵みを日

本語で読者に伝えようとする。

テクスト(原典)の詳しい解説には、『内村鑑三全集 2』収録の鈴木俊郎「解題」がある。それによると、初版本表紙は「基督信徒のなぐさめ」(筆者注、表紙は正確に写すと「基督信徒のなぐさ免」である)であり、本文部分のタイトルは、「基督信徒の慰」となっている。現『内村鑑三全集』は、後者「基督信徒の慰」の立場を取る。わたしもそれに従うことにする。なお、「自序」の結びに「明治二十六年一月廿八日撰津中津川の辺に於て内村鑑三」とあることに関しては、当時泰西学館に勤務していた鑑三の住まいが、「大阪府西成郡曾根崎村番外百三十五番屋敷」にあったことによると右の「解題」は言う。

これまでわたしは内村鑑三の歩みを、時代の嵐の中で翻弄された知識人の生涯の一環として、Critical Biography(評伝)の形式を借

りて検証してきた。本章でも彼の歩みをそうした観点を踏まえながらも、その〈闘いの軌跡〉を『基督信徒の慰』を中心に述べたいと思う。まずは本書の内容を、目次をもつて示そう。

- 第一章 愛するもの、失せし時
- 第二章 国人に捨てられし時
- 第三章 基督教会に捨てられし時
- 第四章 事業に失敗せし時
- 第五章 貧に迫りし時
- 第六章 不治の病に罹りし時

六つの章からなる本書は、いずれも彼がかかわった事件を踏まえ、それを普遍化するための虚構化がなされている。「自序」に鑑三は、「此書は著者の自伝にあらず、著者は苦しめる基督信徒を代表し、身を不幸の極点に置き、基督教の原理を以て自ら慰さめん事を勉めたるなり」と記している。ここには体験の虚構化の問題や、『聖書』をどう読むかという課題や、基督教の原理とは何かとの問いかけが存する。不敬事件後の精神的にも経済的にも苦しい時期にあったが、鑑三はそれを逆手にとつて、書くためのエネルギーとして文学化・思想化しているのである。本書の分量は約十六万字、四百字詰原稿用紙にして四百枚ほどである。

妻かずの死

さて、本書第一章「愛するもの、失せし時」は、鑑三の生涯に即して述べるなら、前章で詳しく述べた、妻かず（加寿子）の死が背

景にある。文章は文語体で記される。書き出しの部分を引用しよう。

我は死に就ては生理学より学べり、之を詩人の哀歌に読めり、之を伝記者の記録に見たり、時には死躰を動物学実験室に解剖し、生死の理由を研究せり、時には死と死後の有様に就て高壇より公衆に向て余の思想を演べたり、人の死するを聞くや、或は聖經の章句を引用し、或は英雄の死に際する時の状を語て、死者を悲む者を慰めんとし、若し余の言に依て氣力を回復せざるものある時は余は心竊かに其人の信仰薄きを歎じ理解の鈍きを責たり、余は知れり死は生を有するもの、避くべからざる事にして、生物界連続の必要なるを、且つ思へらく古昔の英雄或は勇み或は感謝しつゝ世を去れり、余も何ぞ均しく為し能はざらんやと、殊に宗教の助あり、復活の望あり、若し余の愛するもの、死する時には余は其枕辺に立ち、讚美の歌を唱へ、聖書を朗読し、曾て彼をしてその父母の安否を問はんが為め一時郷里に帰省せしむる時讚美と祈祷とを以て彼の旅出を送りし時、暫時の離別も苦しけれ共又遭ふ時の悦を羨み、涙を隠し愁懼を包み、潔よく彼の門出を送りし如く彼の遠逝を送らんのみと。

嗚呼余は死の学理を知り、又心靈上其価値を了れり、然れ共其深さ、痛さ、悲さ苦さは其寒冷なる手が余の愛するもの、身に來り、余の連夜熱血を灌ぎて捧げし祈祷をも省みず、余の全心全力を擲ち余の命を捨て、も彼を救はんとする誠心をも省みず、無慙にも無慈悲にも余の生命より貴きものを余の手よりモギ取り去りし時始めて予察するを得たり。

やや長い引用となったが、右に見るような文語調の重々しい文章があつて、『基督教徒の慰』は、一段と読者に迫るのである。日本の文学界では二葉亭四迷の『浮雲』(一八八七)八九の発表を契機に、山田美妙が『武蔵野』(一八八七)や『蝴蝶』(一八八九)のような時代小説で、若松賤子が『小公子』(一八九〇)九二をはじめとする翻訳などで、口語体の文章の試みを行つており、言文一致運動がはじまつていたとはいへ、文章の主流は、まだ文語体にあつた時代である。鑑三は最初の書物を格調ある文語調で著したのである。それは視覚に訴える文体であり、朗読に耐える文章であつた。現代の批評家若松英輔は、「内村鑑三は、近代日本における稀代の文章家である。また、誤解を恐れずにいえば、彼は高次の言葉を用い得た近代屈指の「文学者」であり、「詩人」でもあつた」とし、ここには「借り物ではない、血肉の言葉に満ちている」ものがあるとす。文語調による鑑三の文章表現を的確にとらえているとしてよい。

死とは何か

鑑三は冒頭、死とは何かに言及する。それは「我は死に就ては生理學より學べり、之を詩人の哀歌に読めり、之を伝記者の記録に見たり」にはじまる。次に科学者として自らの携わつた動物解剖を通し、生と死を考え、また、説教者として死の意味を説いたことにも言い及ぶ。が、それら「死の学理」や心霊上の価値を知つたとて何の意味があるうかと問い、「然れ共其深さ、痛さ、悲さ、苦さは其寒冷なる手が余の愛するもの、身に來」た時、しかも、熱心な祈りも省みられず、「無慙にも無慈悲にも余の生命より貴きものを余の

手よりモギ取り去りし時始めて予察するを得たり」と続ける。

このように書く背景には、言うまでもなく鑑三自身の体験した妻かず(加寿子)の死がある。前章で詳しく述べたように、鑑三は不敬事件の最中に最愛の人を、自身が移したとも言える、インフルエンザで失つた。かずは鑑三の八つ年下の幼なじみであつた。前々章(第四章「三横濱かずとの結婚」)で述べたように、かずは鑑三と故郷(群馬高崎)を同じくする佐幕派の武士の娘であつた。現地調査の折りに高崎の大河鳥川を前にして、少年鑑三は幼いかずを連れ、ここで一緒に魚取りに興じたのではないかの思いが、わたしの頭をよぎつたと、第一章に記したところだ。

幼なじみというのは、特別な思いを、相手に対していつまでも懐くものである。最初の結婚が失敗に終わっただけに、鑑三は再婚した幼なじみの新妻かずとの生活に、満足した日々を送つていた。そうした時に突如不敬事件が出来する。かずは流行性感冒で重体となつた鑑三の介護をしながら、事件に激高して押し寄せた暴漢まがいの生徒をなだめ、食客の山岸壬五と共に家を護つた。が、挙げ句の果ては、鑑三と同じ病気に罹り、あえなく死ぬ。鑑三には、その現実がどうしても理解できなかつた。否、許せなかつたのである。

続いて鑑三は書く。「生命は愛なれば愛するもの、失せしは余自身失せしなり」と。その上で、「此完全最良なる造化、其幾回となく余の心をして絶大無限の思想界に逍遙せしめし千万の不滅燈を以て照されたる蒼穹も、其春來る毎に余に永遠希望の賀歌を歌ひくれし比翼を有する森林の親友も、其菊花香しき頃窺々として千秋に聳へ常に余に愛国の情を喚起せし芙蓉の山も余が愛するもの、失せてより、星は光を失て夜暗く、鶯は哀歌を弾じて心を痛ましむ」と

も書く。文語調の文章はリズム感到に満ち、音読にもふさわしい文字の選択が見られる。

鑑三は富士山を愛した。が、それも今は遠い存在に化したと嘆く。妻の死は悲しく、しかも厳しい現実であった。彼はその現実を前に、「此世は今異郷と変じ、余は尚ほ今世の人なれ共己に此世に属せざるものとなれり」とまで書き、「死とは何か」を問う。

妻の死を文学的に昇華する

妻かすを失った鑑三の打撃は、大きかった。が、彼はそれを客観化し、文学的に見事に昇華している。死んだ幼なじみの妻、かすへの想いは尽きない。鑑三は「愛せしもの、死せしより来る苦痛は僅かに此世を失なひしに止まらざりしなり、此世は何時か去るべきものなれば今之を失ふも三十年の後に失ふも大差なかるべし」と言う。

次に「祈祷の聴かれざる」問題へと入る。鑑三は「祈祷の聴かれざる」に、「人間の眼より評すれば」と括弧を付けながらも、「余は懐疑の悪鬼に襲はれ、信仰の立つべき土台を失ひ、之を地に求めて得ず、之を空に探て当らず、無限の空間余の身も心も置くべき処なきに至れり」とまで書く。その上で、祈りが聴かれぬ、これこそ「真実の無限地獄にして永遠の刑罰」と言い、以下のような悲痛なことを発する。

余は基督教を信ぜしを悔ひたり、若し余に愛なる神てう思想なかりせば此苦痛はなかりしものを、余は人間と生れしを歎ぜり、若し愛情てうもの、余に存せざりしならば余に此落胆な

りしものを、嗚呼如何して此傷を愈すを得んや。

右の問いかけの意味は重い。キリスト教を信じなければ、また、愛なる神の思想がなくなれば、この苦痛はなかつたものなのに、との悲痛の叫びは続く。医師の薬も、友人の転地と旅行の勧めも、牧師の慰めのことばも意味なく、「余は荒熊の如くになり、「愛するものを余に帰せよ」と云ふより外はなきに至れり」とまで言う。

他方で主人公は、祈りの意味を問うのである。「神は祈祷に応じて雨を賜はず、又聖者の祈祷に反して種々の難苦を下せり、祈らずして神命に従ふに若かず、祈祷の要は何処にあるや」と。そして、これを難問だとし、以下、自己の体験を語り、「聴かれざる祈祷の意味を問うていく。

主人公の「余」は、「愛するもの、失せしより数日間祈祷を廃したり」とまで言う。それは前章(第五章)で詳しく述べた「不敬事件」から来る彼への世の糾弾が背景にある。それはより重く、深刻なものとなっていた。続いて「祈らぬ人」となった自身の立場の告白となる。が、神は彼が祈らなかつたことで、彼を捨てることはなかつた。そして「否な、彼が祈りし時に勝りて爾は彼を恵みたり」と言う。その告白の意味は重い。

神は彼を平常無事の時に比べてもはるかに勝る「無限の愛」を示して、「余が爾を捨てんとする時爾は余の迹を逐ひ余をして爾を離れ得ざらしむ」ことになる。結果「然り祈祷は無益ならざりしなり」とのことばが導かれるのである。彼は言う。「自己の願事を聴かば信じ、聴かざれば恨むは之れ偶像に願を掛けるもの、為す所にして、基督信者の為すべき事にあらざるなり、嗚呼余は祈祷を排すべけん

や、余は今夕こんせきより以前に勝る熱心を以て同じ祈禱を爾に捧ぐべし」と。これは新たに生まれた者の信仰告白に他ならない。そして次のような真実の祈りのことばが、衷心から発せられる。

嗚呼あ神よ、爾なれは我等の有せざるものを請求せざるなり、余は余の有するだけの熱心を以て祈れり、而して爾は余の愛するものを取去れり、父よ、余は信ず、我等の願ふ事を聴かれしに依て爾を信ずるは易し、聴かれざるに依て尚ほ一層爾に近づくは難し、後者は前者に勝りて爾より特別の恩恵めぐみを受けしものなるを、若し私の熱心にして爾の聴かざるが故に挫けむものならば爾必ず私の祈禱を聴かれしならん。

嗚呼感謝す、嗚呼感謝す爾は余の此大試練に耐ゆべきを知りたればこそ余の願を聴賜はざりしなり、余の熱心のたらざるが故にあらざりて反て余の熱心(爾の恵に因て得ば)の足るが故に此苦痛ありしなり、嗚呼余は幸福なるものならずや。

ここに「聴かれざる祈禱」の神髄があると言わんばかりである。主人公の「余」は、亡き妻を想い、生前その愛に慣れ、優しく対応できなかつたことを心苦しう思う。「余」の妻は「渾て柔和に渾て忠実なるに我は幾度か厳酷にして不実なりしや」と自省し、我が身を恥じ、責めたてる。ある日、彼は妻の墓に行き、墓石の塵を払い花を手向け、祈ろうとすると「天よりの声」が聞こえる。次のようなものであつたという。

汝何故に、汝の愛するもの、ために泣くや、汝尚ほ彼に報むかへ

るの時をも機もちをも有せり、彼の汝に尽せしは汝より報を得んがためにあらず、汝をして内に顧みざらしめ汝の全心全力を以て汝の神と国とに尽さしめんが為めなり、汝若し我に報ひんとならば此国此民に事へよ、渠の家なく路頭に迷ふ老婦は我なり、我に尽さんと欲せば彼女に尽せ、渠の貧に迫められて身を耻辱ちじゆの中に沈むる可憐な少女は我なり、我に報ひんとならば彼女を救へ、渠の我の如く早く父母に別れ憂苦頼るべきなき兒女は我なり、汝彼女を慰むるは我を慰むるなり、汝の悲歎後悔は無益なり、早く汝の家に皈かへり、心思を磨き信仰に進み、愛と善との業わざを為し、霊の王国に来る時は夥多の勝利の分捕物を以て我主と我とを悦ばせよ

右の文章の「汝」は、書き手の鑑三を指し、「彼」は妻かすを指す。「天よりの声」は、天使の声とでも言えようか。文章は聖書を背景とし、格調高い文語調による文学的表現に終始する。鑑三には、「何故に大文学は出ざる乎」と「如何にして大文学を得ん乎」という二つの評論があり、世界文学(特に『聖書』とヨーロッパ文学)を吸収した文学の理想を述べている。鑑三は文学をよく理解していたから、自らの文章も文学的表現を帯びるのである。

神との対話

『基督信徒の慰』の「第一章 愛するもの、失せし時」は、神との対話でピークを迎える。「余の愛するもの、肉体は失せて彼の心は余の心と合せり、何ぞ思おもひや真性の配合は却て彼が失せし後にありしとは」との含蓄あることばが発せられる。「余」が妻を失つて

得た最大の喜びは、ここにあったと鑑三は言う。逆説的表現による主人公の想いがよく伝わってくる。

「第一章 愛するもの、失せし時」は、以下のような印象的な感謝のことで結ばれる。

余の得し所之に止まらず、余は天国と縁を結び、余は天国に親戚を得たり、余も亦何日か此涙の里を去り、余の勤務を終へて後永き眠に就かむ時、余は無知の異郷に赴くにあらざれば、彼が曾て此世に存せし時彼に会して余の労苦を語り終日の疲労を忘れむと、業務も其苦と辛とを失ひ、喜びを以て家に急ぎし如く、残余の此世の戦ひも相見む時を樂みに能く戦ひ終へし後心暗しく逝かむのみ。

実にふさわしい一編の結びである。ここに至って「聴かれざる祈祷」という表現は、反語となつて読者に迫る。巧みな文学的修辭と言えよう。このことは、本書増訂第十版（一九一〇年七月二八日刊）の中扉に記された以下のことば、「明治二十四年四月十九日所謂『第一高等中学校不敬事件』の後に、余のために其生命を捨し余の先愛内村加寿子に謹んで此著を献ず、願くは彼女の靈天に在りて主と偕に安かれ」とも響きあう。

正宗白鳥は「内村鑑三―如何に行くべきか―」で、『基督信徒の慰』を読み、「六つの慰めのうちでは「愛する者の失せし時」が、文章として最も傑れてゐるが、これは筆者の実感が最も痛切であつたためであらう」との感想を述べるが、よくその本質を捉えている。「筆者の実感」とは、言うまでもなく妻かすの死からくる鑑三の思

いである。

鑑三は妻かすを深く愛していたことを、彼女の死後、強く思うが故に、その死を悲しみ、哀惜する。その実感がよく溢れた文章である。実生活上でも、内村鑑三は妻の命日四月十九日を永く心に刻み、後年に至るまで、かず永眠の日として追憶することとなる。

二 無教会主義の源流

不敬事件を背景に

『基督信徒の慰』の「第二章 国人に捨てられし時」は、前章で詳説した不敬事件がテクストの背景に置かれている。鑑三は事件によつて、人々に指弾され、国賊視されたのであつた。彼は次のように書く。

此時に当て嗚呼神よ、爾は余の隠家となれり、余に枕する場所なきに至て余は爾の懐に入り、地に足の立つべき処なきに至て我全心は天に逍遙するに至れり、周囲の暗黒は天体を窺ふに当て必要なるが如く、三階の天に登り、永遠の慈悲に接せんと欲せば、下界の交際より遮断さるゝに若かず、国人は余を捨て余は靈界に受けられたり。

鑑三は窮地に立っていた。世人の糾弾は急を告げた。が、彼の前には、ソクラット(ソクラテス)・保羅・コロンウエル(クロムウエル)、それに「荊棘の冠を頂きながら十字に登りし耶穌基督」など、「夥多の英霊」が現れ、親友となつた。そして「心霊界の広大を探

り、「これまで見ることでできなかった花・玉・音楽・香味を知り、「実に思はぬ国」に入ったという。彼の経験は、「世界文学の註解書」となり、その結果、「エレミヤの概歌は今註解書に依らずして明白に了知するを得たり」とまで言う。「エレミアの概歌」とは、旧約聖書の「哀歌」をさす。不敬事件やその最中での愛する妻の死を体験するという悲しみの中で、鑑三は『聖書』の〈読み〉を深めているのである。

それは後年、彼の忠実な弟子となる矢内原忠雄が、同じような体験（矢内原事件）をし、東京帝国大学経済学部職を奪われ、隣近所の人々からは白眼視され、幼なじみの友からも絶交文を受け取るという厳しい体験をする中で、その信仰と『聖書』の〈読み〉を深めたこととも通い合う。鑑三を創始とする無教会主義に立つ人々の信仰、—その『聖書』の〈読み〉は、現実の厳しい体験と深く結びついているのである。このことはいくら強調しても、し過ぎるというものではなからう。

鑑三は『聖書』の真理を、「註解書に依らずして明白に了知するを得た」とも言う。彼のこうした考えは、以後の龐大な聖書研究の礎となつていく。不敬事件によつて国賊とまで言われ、世間の人々から弾劾され、事件の最中に妻を失うという事態を経験する中で、彼は『聖書』の深い〈読み〉に集中する。

鑑三は人一倍国思いの念が強かった。それなのに「国賊」だ、「不敬」だと世間から謗られる。彼には帰るところがなかったのである。が、〈神は我を護り給う〉の信念が彼にはあった。そして「国人は余を捨て余は霊界に受けられたり」と誇らかに言う。彼は悲惨の底から叫ぶ。「余は知る誤解の為に離別せし夫妻が再び旧の縁に復

するや其情愛の濃かなる前日の比にあらざる事を、余も亦此国に入られ、此国も亦其誤解を認むるに至らば、其時こそ余の国を思ふの情は実に昔日に百倍する時ならん」と。愛国者内村鑑三の思いが吐露された箇所と言えよう。

本章は「最後まで耐え忍ぶものは救われる」（マタイによる福音書 10・22）というイエスのことばを踏まえ、「余も余の神の助にて何をか忍び得ざらんや」で閉じられる。鑑三の生涯に及ぶおびただしい聖書研究は、先人の研究も十分吸収されているものの、その基本はここに告白されているように、自らの体験した苦難にあつた。現実と立ち向かい、闘いの中で得た体験が生きていた。むろん彼は、新しい外国の神学にも絶えず学んだ。けれども、彼の聖書研究の本質は、先人の書いたものに頼るのではなく、現実との闘いから得たものにこそあつたのだ。

教会に捨てられて

「第三章 基督教会に捨てられし時」も、また当時の内村鑑三の現実と強く結びつくものとなつている。冒頭鑑三は、「茲に用ゆる基督教（念）並に基督信者なる語は普通世に称する教会並に信者を謂ふものにして何れか真何れか偽は全能なる神のみ知り玉ふなり」と記す。これまた書き手の体験に強く支えられて成つた章と言えよう。彼は本章のはじめの方で、次のように書く。

嗚呼なつかしきかな余の生れ生し北地僻郷の教会よ、朝に夕に信徒相会し、木曜日の夜半の祈祷会、土曜日の山上の集會、日曜終日の談話、祈祷、聖書研究、偶々會員病むものあれば信

徒交々不眠の看護をなし、旅立ちを送る時、送らるゝ時、祈祷と讚美と聖書とは我等の口と心とを離れし暇は殆どなかりき、偶々外より基督信徒の来るあれば我等は旧友に会せしが如く、敵地に在て味方に会せしが如く、打悦びて之を迎へたり、基督信徒にして悪人ありとは我等の思はんとするも思ふ事能はざりき。

これは言うまでもなく鑑三ら札幌農学校時代の学生による、独立教会建設途上の体験である。ここでの教会は、単にキリスト教を「信じる者の集まり」と規程している。集会所としての壮大な建物を持ち、派の組織を護るための憲法・規則を備えた、いわゆるこの世の教会ではない。それは、本論「第二章 札幌バンド」で扱った、霊の交わりの場としての集會(教会)である。

続けて鑑三は、「然れども此小兒的の感念(觀念)は遠からずして破碎せられたり」と書く。そして「余は基督教会は善人のみの巢窟にあらざるを悟らざるを得ざるに至れり、余は教会内に於ても氣を許すべからざるを知るに至れり、加之余の最も秘蔵の意見も、高潔の思想も、勇壮の行績も、余をして基督教会に嫌悪せしむるに至れり」とまで言う。

彼はここで旧約聖書の「出エジプト記」二十章三―五や「申命記」十章二十、それに新約聖書「マタイ」による福音書「四章十などで再三示される「主たる爾の神を拜し惟之にのみ事ふべし」が教会の信条だと言う。さらに「ガラテヤの信徒への手紙」一章十一―十二の「兄弟よわれなんじらに示す我が曾て爾等に伝へし所の福音は人より出づるにあらず、蓋しわれ之を人より受けず亦教へられず、惟イ

エス、キリストの黙示に由て受たれば也」などをあげ、これらの教えが、自分のこの世における真理の標準だと自信をもつて言う。

このような考えに立つ内村鑑三は、世の「基督教先達者」や「神学博士」らとは、意見が合わないようになる。教会の人々は彼を「聖典の教訓に逆らひしもの、基督より後戻りせしもの、特殊の天恵を放棄せしもの」と見るようになる。鑑三は以下のように書いている。

余の神学上の思想に就ても、余の伝道上の方針に就ても、余の教育上の主義に就いても、余は余の真理と信ずる所を堅守するが為めに或は有名博識なる神学者に遠けられ、或は基督教会一般より非常の人望を有する高德者より無神論として擯斥せられ、終には教会全体より危険なる異端論者、聖書を蔑にする不敬人、ユニテリアン(悪しき意味にて)、ヒクサイト、狂人、名譽の跡を逐う野望家、教会の狼、等の名称を付せられ、余の信仰行蹟を責むるに止まらずして余の意見も本心も悉く過酷の批評を蒙るに至れり。

鑑三の聖書研究の始源

これらのことばの背景には、札幌農学校時代の教会創立に關しての体験、それにアメリカ留学時代に接したプロテスタント教会各派の対立・憎悪、相互無理解、さらには帰国し、最初に勤務した北越学館での横暴をきわめた宣教師たちと対立した体験などがある。鑑三は「心靈の自由」を願った。その結果は、過酷の批評を受け、北越学館では異端論者とも無神論者とも言われ、「ユニテリアン」とか、「狂人」とまで呼ばれ、誘られた。人々は彼を危険人物と見なし、

敬遠した。彼は言う。神は「此危険より余を救ひ玉ひたり」と。そして次のような決意が述べられる。

人聖書を以て余を責むる時之が防御に足るの武器は聖書なり、教会と神学者は余を捨つるも余の未だ聖書を捨つる能はざるは余は未だ爾に捨てられざるの一徴候なり、余は爾の下僕ルーテルが我が福音なりとて縋りし加拉太書に行かむ、而して彼の平易なる独逸語を以て著述せし其註解書を読まん、「今よりのち誰も我を擾す勿れ、蓋はわれ身にイエスの印記を佩たれば也」(六章拾七節)、嗚呼何たる快ぞ、余も不足ながらもイエスの名を世人の前に表白せしにあらざるや、余も余の罪より遁ん為めに「イエス」の十字架にすがるにあらざるや、

人が聖書に照らして自分を責める時、「之が防御に足るの武器は聖書なり」と彼は断言する。内村鑑三の聖書第一主義、そのおびただしい聖書研究の源泉は、ここに見られる。彼はルーテル(ルター)の「平易なる独逸語」で書かれた「加拉太書」の注釈書から刺激を受けたことを言う。内村鑑三の生涯に及ぶ聖書研究の始原は、ここに見られる。

彼は「余は教会に捨てられたり」とまで言う。その教会とは「尖塔天を指して高く、風琴学を和して幽なる処」である。彼はアメリカに留学中にこうした教会をいくつも見てきた。が、それだけが教会ではないと彼はここにはつきりと書く。

孝子が家計を助けるため寒い夜、物売りをする処、貞婦が夫の病を案じて、早朝「社壇に願を込むる処」も神の教会ではないか、ま

た、自分が「不敬事件」で誤解されて、四方から攻撃された時、友人が自分のために援護してくれたのも「神の教会」ではないかと言う。そうして「神の教会は宇宙の広きが如く広く、善人の多きが如く多し」という考えに至る。「余は教会に捨てられたり而して余は宇宙の教会に入会せり」という認識の誕生がここに見られる。「宇宙の教会」とは、壮大な建物を中心にした人々の集いではない。貧しくとも生きた交わりのある場である。憲法・規則などで縛られた教会にない心のつながりのある集いである。ここには、以下のような文章も見出せる。

余は無教会となりたり、人の手にて造られし教会今は余は有するなし、余を慰むる讚美の声なし、余の為めに祝福を祈る牧師なし、然らば余は神を拝し神に近く為めの礼拝堂を有せざる乎。

ここで注目されるのは、「余は無教会となりたり、人の手にて造られし教会今は余は有するなし」とのことばである。ここでの「無教会」とは、先にふれた「尖塔天を指して高く、風琴学を和して幽なる処」ではなく、真実の心の通う合う処(場)である。ここには「新約聖書」のイエスの教え、「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にあるのである」(「新共同訳聖書」「マタイによる福音書」18、20)が、意識されている。後年の鑑三の寄つて立つた雑誌、『聖書之研究』が代表するような(紙上の教会)の源流が、ここに早くも見られると言えよう。それは聖書研究を第一とする信仰者の集いの場である。

彼の聖書研究は、形骸化した聖書学ではない。海外輸入の〈神学〉でもない。彼は当時の日本の教会なるもの、一財政を外国に頼り、宣教師の援助を借りて成り立つ集いの場を否定する。外国の財政的援助に頼らず、輸入された〈神学〉の助けを借りない、自主独立の聖書研究を第一とする集いの場を彼は目指したのである。第三章の終わりに、彼は次のように書く。

異端の巨魁たる余は公然高壇の上に立ち肅然福音を演べ伝ふるの許可を有せざれば、余は鰥寡孤独憂に沈むもの、或は貧困にして人目を憚るもの、或は罪に恥て暗所に神の免を求むもの、許を問ひ、ナザレの耶穌の貧と孤独と恵とを語らん、嗚呼神よ余は教会を去ても爾を去る能はざるなり、教会に捨てらるゝ不幸は不幸なるべけれ共爾に捨てられざれば足れり、願くは教会に捨てられし故を以て余をして爾を離れざらしめよ。

三 バックボーンは『聖書』

体験に根ざした発言

『基督信徒の慰』の第四、六章には、これまた内村鑑三の体験した問題が色濃く投影されている。第四章の「事業に失敗せし時」の「事業」には、彼の体験したアメリカ留学時代のエルウィンにおける慈善事業、それに帰国後最初に勤めた北越学館での教育事業が背景にある。

彼は言う。「宗教にして事業心を喚起せしむるものは基督教なり」と。そして、「仏教の熱心家にして教理の爲めに大事業を企てし人

あるを聞かず、釈氏の理想的人物は決して事業家にはあらざりしなり」と。それに対して、「基督教の特徴として世の事業を重ざるのみならず之を信するものをして能く大事業たるの聖望を起さしむ」とする。彼も先人に学び、事業に思いを馳せる。「事業、事業、国の爲めの事業、神の爲めの事業、嗚呼世に快と称するもの、中何物か此快楽に勝るものあらんや」と彼は書く。

けれども、「然るに余の愛する読者よ余は失敗せり」と彼は率直に書く。失敗は帰国早々に携わった北越学館事件にはじまり、第一高等中学校不敬事件をピークとして捉えられている。「余の失敗より来りし害は余一人の身に止まらずして余の庇保の下にある忠実なる妻勤勉なる母の上にも来れり、余は世間の嘲弄を蒙れり、友人は余の不注意を責め、余の敵は余の不幸を快とせり」と彼は記す。

彼はアメリカ時代に見た慈善事業にも言い及ぶ。「記者永く米国に在りて基督教国に於る慈善事業の盛なる実に東洋仏教国に於て予想だもする能はざるを見たり」と。しかし、「名望」「法(方)便」を利用して民を教化してはならぬと言う。彼は慈善事業にも「誘惑」が伴うことを見抜いていたのである。また、失敗を恐れるなども言う。次のような勧めは、いかにも鑑三らしい。

基督の十字架上の恥辱は実に永遠に迄互る基督教凱陣の原動力なり、基督の失敗は実に基督教の成功なりしなり。

然らば余も失敗せしとて何ぞ落胆すべき、何ぞ失敗せしを感謝せざる、義の爲めに失敗せしものは義の王国の土台石となりしものなり、後進者成功の爲めに貯へられたる潜勢力なり、我等は后世の爲めに善力 (Power for Good) を貯蓄しつゝあるなり、

余は先祖の功に依り安逸衣食する貴族とならんよりは功を子孫に遺す殉義者とならん事を欲す。

然らば余は余の事業に失敗せしにより絶望家となり、事業家たるの念を断ちしや。

否亦然らざるなり、余は今真正の事業家となりしなり、事業とは形体的のものなりとの迷信全く排除せられてより余は動くべからざる土台の上に余の事業を建設し始めたり、余の事業の敗られしは敗るべからざる事業に余の着手せんが為めなり
(希伯来書十二章廿七節)

鑑三は帰国後、まず教育事業に精を出す。しかし、理想を懐いて改革に乗り出した北越学館教頭職における「事業」は、完膚なきまでの失敗に終わり、彼は這々の体で、東京に逃げ戻る始末であった。さらには実にふさわしいと思われた第一高等中学校の教師職は、不敬事件という、彼の名を全国にとどろかせるような大事件を起すことで、失職する。教育職は天職とまで考えていた鑑三の事業への考えは、完膚なきまでに打ち壊されたのである。鑑三は言う。「事業は精神の花なり果なり、精神より自然に発生せざる事業は事業にして事業にあらざるなり、爾曹まつ神の国と其義とを求めよ然らば事業も自然に爾曹より来るべし」という本章の結びのことばとなる。

貧しさの意味

第五章「貧に迫りし時」は、「四百四病のその中に貧ほどつらきものはなし」にはじまる。第一高等中学校を不敬事件で逐われた鑑

三は極貧の中にいた。特に次章で述べる京都時代がひどかった。貧しいということが、いかに人間の生き方にかかわり、その「心性」を支配するかを、彼は実生活上の体験を通して知っていた。

彼は「貧」から派生する弊害を五つに分けて述べる。まず第一は、自分が栄誉の時代の友人も、貧に迫ると去る。「我が囊の空しくなると同時に我が言は信ぜられざるに至れり、われ友を訪ふも彼れ我を見るを好まず、我れ彼に援助を乞へば嫌悪以て我に答ふ、我と共に祈りしもの、我と共に神と国とに事へんと誓ひしもの、我を兄弟と呼びしもの、今は私の貧なるが故に我とは別世界の人となれり」と鑑三は嘆く。ここには貧窮時代の鑑三の体験が、よく現れている。

第二は、自分一人の「貧」は、忍ぶことができても、自分に頼る家族に「貧」を課するのは耐え難いと言ひ、「貧より来る苦痛の中に我父母妻子の貧困を見る是れ悲歎の第二とす」と書くのである。ここにも彼の実生活上の体験が反映しており、説得力をもつて展開する。

第三は、「貧」のため、働く場を求めて仕事に就こうとする時の苦痛である。「我貧なるが故に彼より要求さるゝ条件多くして我の受くべき報酬は少く、我は売手にて彼は買手なれば直段を定むるは全く彼にあり」で、「彼の要求を拒めば我は惟我が父母妻子と共に餓死する」だけである。そのため「尊敬せざる人にも服従せざるを得ず、貧より来る苦痛の中に食の爲めに他人に腰をかゞめざるを得ず」と鑑三は言う。ここにも彼の体験した不敬事件後の厳しい状況を踏まえた実感が反映しているかのようだ。特に専任として赴任した大阪泰西学館の不利な就任条件などが、想起される。没落士族出身ながら、「武士は喰わねど高楊枝」の精神で生きて来た気位の高

い鑑三には、貧から来る屈従には、耐え難いものがあつたらう。

次に「富足で徳足るとはあらざるべけれど確実なる経験なり」として、「滋養ある食物、清潔なる衣服」が「自尊の精神を維持するに於て少なからざる勢力」があるとす。そして「貧より来る苦痛の中に心に卑陋なる思想」が湧出することを指摘し、これが「貧」の第四の悲歎であるとする。「卑陋」とは、下品とか卑しいことを言う。実に的確な貧から来るマイナス面の指摘である。

第五は、「貧」というものは、他人を羨み、自身を卑屈にすると同時に、「無愛想なる者 (Misanthropist) となすもの」であると言う。

それは集會を忌み、交際を避けるようになり、心は「寒冷頑固」となつてしまふ。鑑三は言う。「貧は我を社会より放逐せしむるものなり、貧より来る苦痛の中に寒固孤独の念是悲歎の第五なり」と。

続いて第六は、「貧すれば鈍する」で、絶望に沈み、「無限の墮落を感じる」ことであると言う。これらことは、鑑三自身が札幌農学校卒業後の歩み、結婚・離婚・アメリカ留学・帰国後の北越学館事件・不敬事件、そして大阪の泰西学館時代を経、京都時代の貧窮生活の体験あつてはじめて書けるものであつたのである。そうした中で彼は、「働けよ」と言い、以下のような意味あることばを記す。

働けよ、働けよ、世界に存する貧の十分の九は懶惰より来る事を記憶せよ、

正直なる仕事は如何に下等なる仕事と雖も決して軽する勿れ、
何を為さざるは罪をなしつゝあるなり (Doing nothing is doing 三)、
働くは祈るなり (Laborare est orare)、身と心とを神に任せ精々
以て働きて見よ、

神も宇宙も汝を助け汝の労力は実るぞかし。

「貧」に対する実に有効な提言、否、「貧」に苦しむ人々への的確な助言であると言ひ換えた方がよいかも知れない。彼は、「正義の爲の貧」もあるとし、「勇氣を以て信仰を以て之を忍ばん」と言う。続いて「基督教は此耐忍を我れに与ふるに於て無常の力を有するものなり」とか、「貧ならざれば基督を悟り難し」と断言する。「貧」の考察でこれほどのものはなく、ここには二十一世紀を生きる人々にも働き掛ける眞実が宿る。

病と信仰

第六章「不治の病に罹りし時」も、また鑑三の体験と深くかわる。彼は腸チブスや流行性感冒で生死の境をさまよつた。若き日の彼は、もともと頑健であつた。背は高く、体軀は堂々とし、しかも「山を抜くの力、世を蓋ふの氣」があつた。が、アメリカ留学以来の無理がたたつて、帰国後はとかく病氣がちとなる。そして「此快楽世界も病める我に取りては一の用あるなし」の状況となり、「存在は苦痛の種」とまでなつたという。彼は「不治の病」とは何かに思いを馳せる。そして「不治と称せし病」が全癒した例も多くあり、「神のみが悉く汝の躰を知るなり」とも言う。彼は近代医学を信じ。その上で、次のように言う。

屋根より落て骨を挫きし時医師に行かずして祈祷に頼るは愚
なり、不信仰なり、神は熱病を癒さんが為めに「キナイン」劑
を我等に与へ賜へり、人これあるを知て之を用ひざるは罪な
り、局部切断の時に当り「コロ、ホルム」劑は天賜の麻睡劑な

れば感謝して受くべきなり、然れども我等病める時に悉く医者
と薬品とに頼るは我等の為す可らざる事なり、我等病重くして
庸医を去りて名医に行くが如く、名医も尚我等を治する能ざる
時は神なる最上の医師に至る也、庸医が私の病は不治なりと診
断する時は我は絶望に沈べきや、否然らず、名医の診断は庸医
の診断の全く誤謬なるを示す事あるが如く、全能の神より見賜
ふ時は不治と称する汝の病も又治し難の病にあらざるべし。

いかにも科学者にして信仰者内村鑑三らしい見解だ。続いて彼は
「不治の病」に陥った人に聖書を読むことを勧める。

汝若し尚ほ普通の感覚を有するあれば無限の快樂未だ汝と共
に存するなり、山野にさまよひ自然と交通して自然の神と交は
るは今汝の能はざる所、淑女巨人と一堂に集ひ思想を交換し事
業を画するは今汝の及ばざる所、然れども若し汝にして四十八
文字を解するを得ば、聖書なる世界文学の汝と共にあるなり、
以て汝を励し汝を泣しむべし、以て汝の爲めに恋歌を供し(ソ
ロモンの雅歌)汝の爲めに軍談を述べ可し(約書亜記 士師記)、
貞操美談あり(路得記)、慷慨歌あり(耶利米亜記)、汝の渾て
の感情に訴へ喜怒哀楽の情かわるがわる起り汝をして少しも倦
怠なからしむ、汝聖書を樂読せよ。

真に味のある聖書の勧めである。「汝聖書を樂読せよ」の「樂読」
は、『広辞苑』など、現代の辞書には見出せない語であるが、「樂し
く読む」の意で、恐らく鑑三の造語であろう。次に彼は、「若し読

書は汝の堪ゆる所にあざれば」と言い、他の「快樂」があるとし、
「心を静めて神の摂理を思ひ見よ」と言う。彼は「世界の大英雄大
聖人の希望と慰め多くは未来存在の信仰にありき」と言い、ソクラ
テス、スウェーデンボルク、ビクトル・ユゴー、ジョン・ウエス
レーらを例に、その信仰の堅さを語る。

本章は「不治の病怖るゝに足らず、恢復の望尚ほ存するあり、之
に耐ゆるの慰と快樂あり、生命に勝る宝と希望とを汝の有するあ
り、又病中の天職あるなり、汝は絶望すべしにあらざるなり」で結
ばれる。『基督信徒の慰』のバックボーンには、『聖書』があつたこ
とは言うまでもない。

「ヨブ記」への関心

鑑三は旧約聖書の「ヨブ記」に早くから関心を示していた。渡米
中フィラデルフィアのエルウィンの知的障害児施設に看護人として
勤務し、苦しい思いの中で「ヨブ記」を読み、「大いに慰められた」
と彼は「余はいかにしてキリスト信徒となりしか わが日記より」
にも記している。

彼が「ヨブ記」をさらに熱心に読むのは、一八九一(明治二四)
年一月の不敬事件の直後と推定される。ヨブの受難は人ごととは思
えなかつたのであろう。彼は「ヨブ記」を繰り返し読み、そこに神
の意志を汲もうとしたのである。

後年、彼は「ヨブ記」をより本格的に論じ、『聖書之研究』にそ
の成果が次々と載せられていく。『聖書之研究』一八一号(一九一五・
八)には、内村鑑三述、坂田祐筆記として「約百記の研究」の題名で、
柏木聖書講堂での講演が文章化される。その中で「約百記は四十二

章あります、聖書中最も長き書の一であります、之を詳はしく了解するには大に学問が要ります」と言い、さらに「約百記が教へます主要な点は誰にでも解ります、学問がなくとも老人でも少年でも男でも女でも解ります、細部に渡りましては私にも解からぬ所が沢山あります、然かし主要な点は諸君に伝ふることが出来ると思ひます、諸君は假令解らぬ所はありましても努めて毎日二三章づつ、読んで来てください」とし、本題に入っていく。四回に及んだ「約百記の研究」は、「ヨブ記」導入とも言えるものである。坂田祐筆記による話術体の文章は、親しみ易く一定の効果をあげているかのようだ。ここでくり返して書く。鑑三の「ヨブ記」研究の始原は、大逆事件後の鑑三苦難の時代にあったと。

『聖書之研究』一三九―二四六号(一九二〇・六―二一・二)には、内村鑑三述、畔上賢造記として「約百記の研究」と題した連載が載る。それは『約百記』(聖書研究社、一九〇四・八)他にまとまる。本格的「ヨブ記」研究の誕生である。その第一講は「約百記は如何なる書である乎」にはじまる。鑑三は神学校を出た伝道者ではなく、聖書学者でもない。彼は真剣に人生を生きた一人の人間(信者)であった。彼は早くから「ヨブ記」の真価を知っていた。関心をもつて「ヨブ記」を読み、また慰められていた。彼は「ヨブ記」を実人生の体験を通し、しっかりと捉えようとした。単行本『約百記』では、前書き部分の箇所、いわゆる註解書を「渉獵するに怠らざりし」と言い、何人かの欧米の聖書研究者の書物に学んだことにも言及する。「力量以内に於て及ぶべき丈該博ならんことを努めたり」とは、鑑三の率直なことばであろう。

『基督信徒の慰』には、「ヨブ記」が、反映しているというわたし

の思いは、早くからあった。ヨブの苦悩は、鑑三の苦悩であり、彼はヨブへの思いを対極に据えながら、『基督信徒の慰』を綴る。彼の体験は「ヨブ記」を通すことで、より普遍化してそのテクストに昇華するのであった。『基督信徒の慰』の根底に見られる苦難からの解放は、鑑三が「ヨブ記」に認めたものであり、それは後年の聖書研究会でのヨブ記講演(一九二〇・四―二二)にも繋がる思想であった。

なお、『基督信徒の慰』の「序」で、鑑三は先にも引用したように「此書は著者の自伝にあらず」と記していた。自伝にはこの後、英文で発表される*How I Became a Christian: out of My Diary*が相当するが、『基督信徒の慰』は、体験したさまさまな出来事を客観化、対象化して「基督教の原理を以て自ら慰めん」(自序)とした著作であった。その底流にはヨブの試練が認められることを再度確認したい。それあってこそ『基督信徒の慰』は、書き手の鑑三自身を慰めるばかりか、多くの愛読者によって、以後長く読み継がれることになったのである。

四 処女出版の反響

処女出版

『基督信徒の慰』は、正確に言うると内村鑑三の準処女出版であった。前年(一九二〇年)十月二十四日付で『未来観念の現世に於ける事業に及ぼす勢力』を警醒社から刊行しているの、厳密には第一刊行物とは言えない。しかし、『未来観念の……』という著作は、三十ページほどの小冊子であって、書物と銘打つには、やや大げさ

の感もなきにしもあらずであった。パンフレットとでも言つてよい形態の印刷物である。そこで一般には鑑三の第一著作『処女出版』は、『基督教徒の慰』とされる。そこでここでも処女出版説を採ることにした。

『内村鑑三全集2』に鑑三の「回顧三十年」の一文が載せられている。これは一九二三(大正一二)年二月二十五日刊行の『基督教徒の慰』の「滿三十年紀年版」に載つたものである。ここには、興味深いことどもが記されている。

彼はこの一文の最初に、「今より三十年前に日本に於て日本人の基督教文学なる者はなかつたと思ふ」と言い、「若しあつたとすれば、それは欧米基督教文学の翻訳であつた」と書く。そうした状況下、『基督教徒の慰』が多くの読者に迎え入れられたのは、「神の佑助に由」るのであり、「余はたゞ心の中に燃る思念に強いられ止むを得ず筆を執つたのである」とも書いている。

鑑三は世の一般のいわゆる(文学)を嫌つた。けれども、彼の残したものは、当時にあつての優れたキリスト教文学となり得たのである。先に名を挙げた正宗白鳥は、本書を当時の日本に於ける最高の「私小説」として高く評価することになる。そう言われれば、自己の体験を虚構化しながら真実に迫ろうとしたその手法は、「私小説」と言つても間違いはなからう。二十一世紀のこんにち、「私小説」の研究は盛んだが、『基督教徒の慰』を「私小説」として高く評価したのは、正宗白鳥が最初であつたことを、ここで再確認しておきたいものである。白鳥はなぜかくも鑑三を的確に捉え得たのか。白鳥を論じて内村鑑三に迫つた、佐々木雅發『正宗白鳥考』の見解を、以下に紹介しておきたい。

白鳥における固有の世界観、人間観の形成の道は、決して平坦なものではなかつた。白鳥の内村鑑三との確執は、そのことを如実に語つてゐる。日本の生んだ、最も偉大なクリスチャン鑑三を、終生相手どらずにはいられなかつた白鳥の執念とはなんであつたのだろうか。おそらくそこには、鑑三の信仰が肚の底から納得できるかできないかが、以後の自己の生き方を決定するであろうことを直感した白鳥の、いわばぎりぎりの勝負がかけられていたのである。内村鑑三は科学者であつた。が、にもかかわらず彼は、なんのためらいもなく、独一無二の神の存在を靈魂の不滅を、肉体の復活を、来世の至福を、最後の審判を、キリストの再臨を説いて倦まなかつた。つまり鑑三は、『聖書』に描かれたキリストの言動の一切を信じていたので。

若き日鑑三に師事し、のち、劇作家となる小山内薫は、文筆家として出発した鑑三を、詩人として捉える。小説「背教者」で小山内は鑑三を森川先生と呼び、「当時は不平家厭世家悲憤家の一人だつた」とし、その上で「併し森川先生は高山樗牛よりは詩人だつた。詞の飾りや文章の綾はなかつたが、本當の詩人の魂を持つてゐた」と書く。鑑三は若き小山内薫を捉えて離さなかつたのである。なお、小山内薫の「背教」に関しては、第十二章の「弟子たちの離反」で詳説する。

山路愛山の評

鑑三は「回顧三十年」で、本書に関する批評に及び、一筆添えて

いる。彼は「此書初めて出て第一に之を歓迎して呉れた者は当時の『護教』記者故山路愛山君であつた」と言い、「君は感興の余り鉄道馬車の内に在りて之を通読したりと云ふ」と記す。山路愛山は前々章の二で少しふれたが、この頃、徳富蘇峰の知遇を得、民友社に入り、『國民新聞』記者として、同紙及び『國民之友』に政治および史論に筆を執っていた。同時にキリスト教メソジスト派の雑誌『護教』の主筆でもあつた。その第八十八号（二八九三・三・一）に愛山は、「基督信徒のなぐさめ」のタイトルで、以下のような書評を書く。本書『基督信徒の慰』への最初の本格的書評なので、以下に全文を引用する。

内村鑑造氏は独り水産学士として日本に数少なき人物たるのみには非ず、彼れは基督敎文學者として非凡なる天才を有せり。吾人は実に斯の如く曰ふ、平板なる微温なる、往々にして退屈なる基督敎文學界に於て独り俊爽なる明快なる、沈痛なる、赤誠なる君の文字を見る爰ぞ歓迎せざるを得んや

吾人は著者に諷ふ者に非ず然れども吾人は著者の書に於て殆んど吾を忘れたり、覚へず巻を終りたり脈々たる神氣人を襲ひ、或は鼓舞せられ、或は激励せられ、或は冷笑せられ、或は同感の情に堪へがたからしめらる、吾人は其何の謂たるを知らずして、終に心を著者に奪はれぬ。吾人は激賞せざらんと欲するも能はざる也。此書分つて六章となし著者自身を愛するものゝ失せし時、国人に棄てられし時、基督敎会に捨てられし時事業に失敗せし時貧に迫り不治の病に罹りし時に置き基督信徒の有すべき慰藉を説く往々著者の自叙伝なるが如きものあり、其国

を以て愛人に比し、之に棄てられしものゝ感慨を序する所、覚へず吾人をして高等中学校敎諭として欠敬事件（筆者注、不敬事件）の波瀾に巻かれし君の當時を回想せしむ

一気に書いた書評なのであろう。愛山は、鑑三を「水産学士として日本に数少なき人物」として認める。愛山はすでに述べたところだが、東洋英和学校の講師時代の鑑三を知っており、しかも講演を聴いて感動し、以後も鑑三の軌跡を追っていたからこそ、こう言い得たのである。続いて「彼れは基督敎文學者として非凡なる天才を有せり」と言い、「平板なる微温なる、往々にして退屈なる基督敎文學界に於て独り俊爽なる明快なる、沈痛なる、赤誠なる君の文字を見る爰ぞ歓迎せざるを得んや」と続く。これは決して誇張ではあるまい。鑑三は幼少時から父宜之の特訓によつて四書五經を学び、長じては英語を学ぶことで書くことには自然意識的となり、独特の日本語表現力をも身につけていたのである。さらに愛山は、「吾人は著者の書に於て殆んど吾を忘れたり、覚へず巻を終りたり脈々たる神氣人を襲ひ、或は鼓舞せられ、或は激励せられ……」と本書への讃辞を続ける。

また愛山は、本書が二年前の不敬事件と密接に結ぶつくの見抜き、「基督信徒の有すべき慰藉を説く往々著者の自叙伝なるが如きものあり」と言い、「其国を以て愛人に比し、之に棄てられしものゝ感慨を序する所、覚へず吾人をして高等中学校敎諭として欠敬事件の波瀾に巻かれし君の當時を回想せしむ」という同情心に富んだことばで結ぶ。山路愛山は佐幕派の武家の出であり、鑑三の苦難をよく理解した評論家であつたとしてよい。

『女学雑誌』ほかの評

山路愛山の右の評が『護教』に載つたのと同じ日(一八九三・三・一二)刊行の『女学雑誌』(三四〇号)にも、本書の紹介文(無署名)が載つた。こちらは愛山の書評の六倍にも及ぶ長文である。無署名なので筆者が誰かは不明である。が、当時は書評や新刊紹介などは、編集人が書くことが多かった。そこで当時の編集人巖本善治が有力視される。が、断定は避けたい。冒頭評者は、「余は今ま、一書を読み了り、将に感激する所を記さんとす。此書は友人内村鑑三君の著なり。客月、大坂にて君と会せし時、君は日ならず此書を出版すべきにより、一評を寄せよと告げたり」と書き、第一章から第六章までのタイトルを掲げる。続いて感じ入つた本書の内容を、直接引用する形で紹介するが、「心の感切する所が、何如に其筆を動かし、其筆何如に涙滴を点じて、多情多感の文を成せしやを見んと欲し、輒はち之を読みたり」との読後感をも加えている。「多情多感の文」とは言い得て妙である。

プロテスタント教会の超教派的雑誌であつた『六合雑誌』は、一八九三(明治二六)年三月十五日刊行の第一四七号で、本書を取り上げ、好意的に批評する。評者は当時の内村鑑三を最もよく知つていたと思われる同誌編集者の横井時雄とされる。評者はまず「世間多くの著作は概ね著者の実子に非ずして養子なり、名は著作なりと雖も実は翻訳なるか然らずんば編纂なり、然れど此の書こそは著者内村鑑三氏の実子、その肉の肉、骨の骨なり、看よ奈可に之の子か其の父の相貌に似たるかを」と書く。鑑三をよく知るが故に書けた批評としてよい。

評者と見なされる横井時雄は、著者内村鑑三の過去の試練を慮り、「其神を信じキリストを信するの心は金鉄が百鍊の火を経たるか如く益々精良を加へしならん、本書実に此等の逆境に処するに当り著者心中の激戦を記するもの、而して勝利はいつもイエス、キリストに帰せしこそ目出度けれ」と言う。結びでこの評者は、「著者が文才に富める事は今更ら喋々するを要せず、書中到的処に奇言あり、矯詞あり、寸鉄入胆に迫るあり、大槍振つて敵陣に臨むあり、一々此に列挙して称誉するに違あらざるなり」とする。

他にも雑誌『三籟』『福音新報』『聖書之友雑誌』などが、『基督教徒の慰』を論評している。また、『護教』第九十七号(一八九三・五・一三)は再び本書を採り上げ、無水生「基督教徒の慰」を読む」を載せる。評者はまず「予等をして愛好措く能はさらしむる所以は水平線下に潜伏せる孤独信者に同情を表する厚きことなり」と言い、結びに「此書か幾多雑書の群を離れて遙に心靈界の高処に懸り灼々たる光輝を放つ所以か思ふに予等と同感の人士は必ず此書より鴻益を享けたるべしと確信す」と結ぶ。

さらに『同志社文学』第六十五号(一八九三・五・二〇)は、A. B. の署名で、世に著書は多くとも「陳腐の文字」「軽薄の言論」ばかりだとし、「独り内村氏が此書に至つては語々肺腑より出で、字々熱涙なりとも評すべく、實に是誠情より発したる、一篇の写実小説とも云ふべきなり」とまで言う。「写実小説」とは言い過ぎながら、言わんとするところは何となく分かる。そして「真に基督教徒のなぐさめとは其価無限無量といふべきかな」で結んでいる。総じて刊行直後の本書への批評は、好評で同情的のものが多かったと言えよう。

なぜ『基督信徒の慰め』は、よく読まれたのか

『基督信徒の慰め』は、以後もよく読まれた。鑑三はアメリカのペル宛での便りに、「私の著作が善い働きをしていることは感謝に堪えません。売れ行きは頗るよく、その善き働きの結果を報ずる手紙が、全国到るところから来たりつづあります」（山本泰次郎訳、以下同じ）と書いている。続けて彼は、「もし現在只今、どんな仕事を一番望んでいるかと問われるならば、聖書の分り易い注釈書を書くことを先ず第一にあげます。かかる書物はわが国にはきわめて少なく、国民を急速に教化する上の一大欠陥となっています。私は、キリスト教は聖書であり、かつ聖書知識なくしては真の意味のキリスト教はあり得ず、との信念をいよいよますます、かたくしつつあります」と書く。ここには「聖書知識なくしては真の意味のキリスト教はあり得ず」という鑑三の確固たる立場が早くも顔を出している。後年自ら主宰した雑誌『聖書之研究』を舞台にして展開する「紙上の教会」の原理が、早くも顔を出しているとも言えよう。

若松英輔は、『内村鑑三をよむ』¹¹⁾で、「苦しみのなかの恩寵―『基督信徒の慰め』のタイトルで、特にその「第一章 愛するもの、失せし時」に光を当てて本書を論じた。中で若松は「内村鑑三は、近代日本における稀代の文章家である」と言う。これまで、わたしもしばしば指摘してきたように、鑑三の文章は魅力に富んでいる。片言隻語といえども疎かにしない。若松はそこには鑑三自身の体験した、――離婚・アメリカでの厳しい生活・北越学館事件、そして不敬事件・愛妻かずの死という悲劇をエネルギーに、翻訳調でない伝統の母語で綴ったのが『基督信徒の慰め』であったとする。

鑑三は妻かずの死という現実の事件を前に、「愛するもの、失せし時」の章を『基督信徒の慰め』の最初に置いた。右の若松英輔はこのことを念頭に、「永遠の世界があるなら、先立つことはもつとも深き愛の営みとなる。なぜなら、残された者は死したのち、必ず先に逝った者に迎えられ、決して孤独に苦しむことはないからである。そればかりか死者はいつも生者に寄り添い、守護している」との〈読み〉を導く。

内村鑑三には多くの評伝や研究書があるが、どれもが処女作とされる『基督信徒の慰め』に多くのページを割き、高く評価する。それは鑑三生存中から没後九〇年以上を経て変わらぬ。なぜ『基督信徒の慰め』はかくも長き間、人々の心ともしびと成り得ているのか。関根正雄編著『内村鑑三』¹²⁾は、『基督信徒の慰め』を採り上げ、大阪時代の内村を知るためには「見逃すことはできない」とし、「六つの章に分けられたこの書は、すでに各章の表題が示しているように、著者の個人的な経験をとおして受け取った霊のなぐさめを説明したものだからである」と言う。その上で「不敬事件をきっかけにこれら六つの試練が一度に内村を襲った。これらの試練を（余は如何にして基督信徒として堪えしか）が語られているのである」と見事にまとめる。

また、近年の小林孝吉『内村鑑三 私は一基督者である』¹³⁾は、『基督信徒の慰め』に関して、「この世の悲歎と受苦に絶望することなく、真の慰めは（神）とともにあることを、繰り返し繰り返し、一信徒の自分自身に向かって語りかけている。不敬事件で妻かずを失い、日本の国人に捨てられ、教会からも非難を受け、事業にも失敗した、日本のヨブの一人である内村鑑三にとって、『基督信徒の慰め』は、

いかなる現実の悲嘆も〈希望〉へとつながっていることを全身全霊で告げようとしている」と言う。そして「第一著作『基督信徒の慰』には、一基督者・内村鑑三の信仰の本質と霊的姿勢が凝縮されている」との〈読み〉を示す。前節で詳しく考察したように、鑑三は確かに「日本のヨブの一人」として『基督信徒の慰』を書いたのであつた。

コロンブスへの関心

同じ頃、鑑三は『記念論文 コロムブス功績』(一八九三・二)を警醒社書店から刊行する。イタリアの探検家であり、航海者のコロンブスがアメリカ大陸発見に繋がるアメリカ海域、西インド諸島のサン・サルバドルに到着したのは、一四九二年のことであつた。それから四〇〇年の一八九二年前後は、アメリカ大陸発見四〇〇年として、アメリカではそれを記念した万国博覧会がシカゴで開催され、日本でも大航海時代の探検家コロンブスへの関心が高まり、新聞・雑誌の特集も見られるようになってきた。鑑三もそうした世のコロンブスへの関心を意識して本書をまとめたものと思われる。鑑三は世の動き、動向にも敏なところがあり、コロンブスの功績を紹介しようとしたものであろう。

不敬事件後の苦しい状況、——彼の貧窮の時代に少しでも家計を潤そうと警醒社書店の福永文之助に頼み込んでの出版である。収録論文は前年一八九二(明治二五)年に『六合雑誌』や『基督教新聞』などに書いたものである。その経緯と内容の概略は、『内村鑑三全集2』の松沢弘陽「解題」に詳しい。中に「世界史におけるコロンブスのアメリカ発見についての、さらに、世界史における神の「撰

理」とそのもとの「英雄」の意義について、内村鑑三の独自の理解を打ち出したもの」とある。

なお、松沢の「解題」は、鑑三が翌年一八九四(明治二七)年五月刊行の『地理学考』に、本書『記念論文 コロムブス功績』から二回にわたる長文の引用があることからして、「両者が基本的な語彙を共有している」ことを指摘する。本書は今日でもコロンブス論を展開する上での、一文獻としてよいのであろう。『記念論文 コロムブス功績』には、「前書」があり、いかにも鑑三らしい記事を見出すことが出来るので、その一節を引用しておこう。

昨年来コロムブス並に彼の偉業に関し欧米歴史家の著述にかゝりし書は実に数十種の多きに至れり 而して見点の異なる探検家の特性並に発意に就て異説紛々其何れか真なるを知るに苦しむ加之余輩文明世界の一隅にあり その著述だも悉く手にするを得ざりしが故に此書の記事或は已に陳腐に属せしものあらむことを恐る然れども余輩は出来得る丈けの研究を尽しアービング、ライス、カステラの著述は勿論余輩の目に留まりし簡要なる記事は自由に適用せり 而して伝記の骨子は「サイクロピヂヤ、ブリタニカ」に依り発見地の状態は重にカステラ氏の雄健なる記事に依れり

「前書」の終わりには、「明治廿六年二月十七日 大阪泰西学館に於て 内村鑑三」とある。「第二章 緒言」には始まり、「第十三章 晩年」に至る叙述は、読みやすく後年再版(一八九九・二・九)されたのも首肯される。安月給の泰西学館の給与を補うためとはいえ

鑑三はよき仕事をしたことになる。しかも、書物を書くこと、それによって生活を維持するという方法も、鑑三は学ぶのであった。

- 注(1) 若松英輔「内村鑑三をよむ」岩波ブックレットNo.45、岩波書店、二〇二二年七月五日。一八〇二一ページ
- (2) 内村鑑三「何故に大文学は出ざる乎」「国民之友」第二五六号、一八九五年七月一三日
- (3) 内村鑑三「如何にして大文学を得ん乎」「国民之友」第二六五号、二六六号、一八九五年一〇月二日。一九日
- (4) 正宗白鳥「内村鑑三―如何に行くべきか―」「社会」一九四九年四月一日〜五月一日、のち『正宗白鳥全集』第二五卷、福武書店収録。一九八四年六月三〇日。二〇九〜二六一ページ
- (5) 関口安義「評伝矢内原忠雄」新教出版社、二〇一九年四月二五日。第九章「暗い時代を生きる」四〇一〜四四五ページ
- (6) 『内村鑑三全集2』（岩波書店）に収録された『基督信徒の慰』では、この箇所が「基督教」となっているが、章題「基督教会に捨てられし時」などからして（会）の脱落と思われるので補った。

- (7) 注4に同じ
- (8) 佐々木雅發『正宗白鳥考』明誠書林、二〇一九年九月二五日。二二一八〜二八九ページ。
- (9) 書評は当時にあつて多く出た方である。鈴木範久の『内村鑑三日録 1892〜1896 後世へ残すもの』（教文館、一九九三・九・二五）の巻末「史料」には、その主要なものが収録されている。その労に感謝しつつ、そのいくつかを援用させていただいた。
- (10) D・C・ベル宛、一八九三年五月一三日付。山本泰次郎訳『内村鑑三日記書簡全集5』書簡1収録。教文館、一九六四年七月三〇日
- (11) 注1に同じ。二四〜三五ページ
- (12) 関根正雄編『内村鑑三』清水書院、一九六七年二月五日。七一ページ
- (13) 小林孝吉「内村鑑三私は―基督者である―お茶の水書房、二〇一六年一月一五日。一一八〜一一九ページ

受領日 二〇二〇年二月一九日
 受理日 二〇二〇年六月一〇日